

GREEN EARTH 緑の地球

地球環境のための国境をこえた民衆の協力

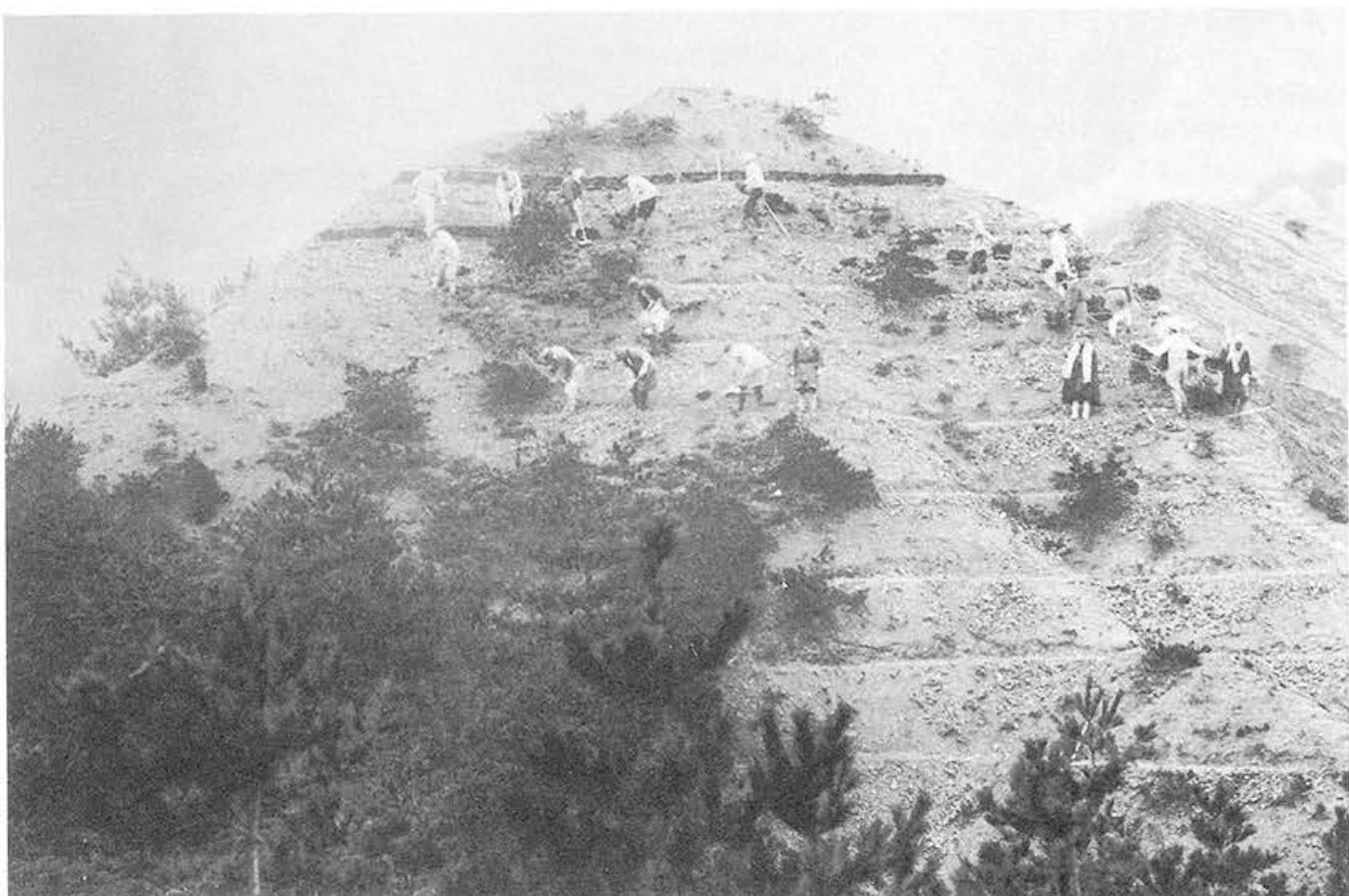
COM21 通巻296号 発行/COM企画室

1992・3

2

- 地球環境と南北問題 日高六郎……P 4~6
- 中国に苗木を送り続ける城坂光弥さん…P 8

編集／緑の地球ネットワーク(準)
Green Earth Network
大阪市港区市岡元町3丁目9-16 西建ビル
TEL.06-583-1719 FAX.06-583-1739(番552)
郵便振替 大阪 4-128465



写真は1932年当時の泉州郡東鳥取村(現在の阪南市和泉鳥取付近)の植林風景
(大阪府森林組合連合会提供)

「近畿の山林は、つい40~50年前まではハゲ山も多く、荒れた山がほとんどやった。神戸の六甲山から岩ばっかりやったし、大阪の泉州あたりの山はみんなハゲ山やったんや。それを戦後になってから、みんなしてモッコかついで、クワ持つて山のてっぺんから麓まで一所懸命木うえたんですわ。当時はまだ労賃も安かったんで村中総出で山にはいって砂防溝を斜面にこさえて、マツとかクスノキとかヤシャブシなんかをうえましたわな。それが20年たち30年

たって立派な森がでたんやけど、その山もいまでは人手が足りんようになって間伐や下草刈りができるでまた荒れきどる。あのころ(1950年ごろ)50円やった日当がいまでは1日2万円でも来てがないんやから……。バブルがはじけて、これからはいままでと違って、山林や農村を見直すことになればほんまえんですけどな」

(この写真を提供していただいた森林組合の南嘉宣専務理事の話)

緑の地球ネットワーク講演会
物は小さく、関係は豊かに
—生命系の根本からあるべき経済と社会をさぐる
中村 尚司さん(龍谷大学教員)
●と き/3月27日(金)午後6時30分~
●ところ/ルーム・ごむ(☎06-583-1719)
(大阪環状線・地下鉄中央線「弁天町」⑥出口すぐ)
●参加費/ 700円

自然と親しむ会

- と き/4月5日(日)午前10時
阪急宝塚線「池田」駅改札口集合
- 目的地/大阪府豊能郡能勢町の山林
能勢町森林組合の植林に参加し、
桜の花見、ワラビとりもします。
- お問い合わせは緑の地球ネットワークまで

地球環境の再生へ、アジア民衆の国際協力を実現するために！

中国緑化基金にご協力を！

私たち「緑の地球ネットワーク」準備会は、ますます危機の度合いを深めつつある地球環境を、アジアの民衆の国境を越えた協力によって、一歩でも再生の方向へ逆転させたいとの強い願いで発足しました。

環境問題のなかでもアジアの民衆の生存にとって焦眉の課題となっているのは森林消失と水土流失であり、私たちは中国山西省雁北地区の渾源県で行われている緑化事業への協力から具体的な第一歩を踏みだすことにいたしました。

文明の歴史は一面では自然破壊の過程であり、たびかさなる戦火も加わって、中国の森林は徹底的に破壊されました。たとえば山西省の森林被覆率は1949年当時わずかに2.4%にすぎませんでしたが、それには日本軍がこの地を中心に展開した「三光政策」（焼きつくし、奪いつくし、殺しつくす）の影響も少なくありません。

建国以後、環境改善と緑化の事業は精力的に展開され、とくに都市部や鉄道・道路沿線の緑化はそこを訪れる日本人も驚くほどすすみ、全省の緑被率

も17%（日本は67%）まで回復しています。しかしそれはあくまで点と線で、広大な農村地帯や山地では依然として茶一色の光景が広がり、それが過酷な自然条件と経済的貧困という悪循環を招いていました。

80年代後半、「三北防護林プロジェクト」の始動とともに、一帯の緑化事業は活性化し、私たちが国際協力をはじめる渾源県の農村では、村人全員が年間10日間を植樹労働にあて、ハゲ山や荒れ地はもとより畠地の一部を森林化するなど、21世紀の初めまでには一帯の風景を変えてしまうほどの勢いで緑化がとりくまれております。長い中国の歴史のなかでも、あるいは森林危機が叫ばれる今日の世界でも、これほどの規模の緑化はまれでしょうから、この地域を「緑化最前線」と呼ぶのはけ



渾源県・西留郷の造林記念碑。「植樹造林・緑化祖国」の文字が見える。この地にも緑豊かな「日中友好の森」を！

っして過言ではないと思います。

この事業にとって最大のネックは資金の不足です。現地では1ヘクタール（=1町歩=3000坪）あたりの植樹費用は日本円で3万5000円ほどですが、省からの補助は平均10%、苗木代程度であり、基本的には農民の負担でおこなわれています。現地の1人あたり平均年収は約1万円ですから、有効にもちいられるなら、日本からの国際的支援はたいへん大きな役割をはたすことができます。

私たちは92年の緑化協同事業の資金として中国人民元10万元=日本円250万円の提供を約束しました。すでにたくさんの方のご入会をいただき、会費を一時、充当することによって、5月の緑化訪中団がその全額を持参する予定です。小さな出発でも、地域では大きな効果をあげることができますし、これが成功すれば周辺にさらに広がり、ゆくゆくは大きな流れ、国際的循環へと発展するにちがいありません。

いまたいせつなのは、はじめること、だと思います。ひとりでも多くのみなさんの、中国緑化基金への可能な限りのご協力をお願ひいたします。

地球環境の再生へ、アジアの民衆の国際協力を実現するために！

21世紀へ、子や孫の世代に希望をひきつぐために！

5月6日～18日 上海→太原→五台山→渾源→大同→北京

「中国緑化協力団」に参加を！

渾源県での協同植樹、桑干河青年緑化プロジェクトの考察等

山西省渾源県でおこなわれている緑化事業に協力するため、緑の地球ネットワーク（準）は緑化協力団を派遣し、国際協力の第一歩をふみだします。

黄土高原の東端、太行山脈のふもとに位置し、長い歴史が育てた文化遺跡（五台山、恒山、雲岡の石窟など）の多い、たいへん魅力的なところです。地元での時間をゆったりとり、緑化以外の面でも双方向の交流を充実させたいと思います。

専門の知識など必要としませんの

で、どなたでも積極的にご参加ください。締切りが迫っておりますので至急にご連絡ください。

★期 日 1992年5月6日～18日

★訪問地 上海→太原→五台山→渾源→大同→北京

★費 用 26万円程度

★締切り 3月25日

*渾源県の西留郷、恒山などで植樹活動に参加し、多彩な交流活動をおこないます。

*希望者にはより詳しい資料を送りますので、ご連絡ください。

地球環境と南北問題

日 高 六 郎 (社会学者)

環境問題と南北問題はこれから21世紀にかけての世界の最大課題です。

以下は緑の地球ネットワーク(準)主催の講演会における発言要旨です。

世界史の大激動のなかで

「南北問題と環境問題」というテーマですが、この問題にくわしい方がおいでだと思います。私は専門家ではありません。問題の重要性を感じるひとりの市民として私の考えをお話し、あとで意見を交換したいと思います。

私はときどきフランスに行ってるんですけど、むこうで見聞したことはいろいろあります。1989年にはベルリンの壁の崩壊をはじめ、いろんなことがありました。ヨーロッパでの反応をみていると、まさに世界史の激動のなかに生きていることを実感できます。1989年はフランス大革命から200年ですけど、フランスの政治学者デュヴェルジェはこの年の事件が実りあるものとなったら、1789年に匹敵する年として評価されるだろうと述べました。

翌年は湾岸戦争があり、ドイツの市民は、イラクにたいするアメリカの武力行使が現実になるなら、その瞬間に街頭に出ようと約束しあい、ベルリンでは2万人近い市民が街頭で抗議デモをやりました。フランスでも多くの市民が抗議デモに参加しました。

戦後世界の大きな課題として

そういう政治経済の激動がありましたが、南北問題ならびに環境問題は、戦後世界の課題として、依然、未解決のままであります。第2次大戦直後、国際連盟に加入していた国は50か国前後でしたが、いまその3倍の160か国が国際連合に加入しています。1960年代はアフリカの時代といわれてアフリカで独立があいつぎ、当時の人たちは政治的独立は経済的発展にむすびつくものと予測していました。ところが新たに独立した国のほとんどで経済的発展がみられず、むしろ下降線をたどっているのが現実です。それはなぜなのか、そこに南北問題があります。

そして1960年代ごろから、新たに環境問題が浮上してきます。日本で水俣

の問題がでてきたのが56年です。つづめて考えると、環境問題は南北問題と無関係どころか表裏の関係にあることがわかります。表面的には南北問題は国家と国家の関係、企業と民衆の関係というように人間と人間の関係ですし、環境問題はそもそもは人間と自然の関係です。ところがこの二つは表裏一体にからみあってでてくる。南北問題は開発の問題といってもいいわけで、開発と環境の関係におきかえることもできます。

人間は自然を開発しつつ生きてきましたから、開発を全面否定することはできません。しかしその開発は自然と人間、人間と人間の関係を破壊しがちで、そこに問題が生じます。人びとの開発意欲は北においても南においても依然として旺盛ですね。たとえば日本は政府、財界、官僚、こぞって開発に熱心ですし、南においても政府、企業、官僚が開発に熱心なだけでなく、民衆もひじょうに敏感です。

北の環境重視はほんものか

一般論でいえば、北の民衆のほうがむしろ環境問題に熱心であるかのようにみえます。しかし南の言い分としては、環境問題をひきおこしたのはこれまで無制限の開発路線を突っ走ってきた北である、北は生活水準が高まり民衆の消費欲望も満たされてきた、公害で苦しんでいるといつても全員が喘息になったわけではない。百人にひとり千人にひとりくらいで生活水準があがるなら、むしろ公害がほしいくらいだ、そんなとき北の人びとがにわかに「環境、環境」というのは偽善ではないか、というのです。その指摘はかなりあたってるんですね。

しかも北が環境問題にほんとうに熱心かというと、そうではないんです。6月の環境会議でCO₂(炭酸ガス)規制の合意がえられないことはいまから予測されています。数日まえ、ブッ



撮影・高橋章三さん

シュ政権首脳の言動をテレビでみて、私は啞然としました。2000年のCO₂排出量を1990年の水準にとどめることをECと日本が合意しました。たいへんゆるい規制ですが、地球温暖化を防ぐためということで、日本の保守政治家や官僚も合意したんです。ところがアメリカは同調しない。ただでさえ落ちこんでいるアメリカ産業は、そんなことをすれば回復できない、それがブッシュ政権の立場だというのです。いちばんCO₂を撒き散らしている国がアメリカで、世界の30数%といわれます。アメリカのGDPは世界の約20%で、戦後すぐの45%からここまで低落しました。GDPは世界の20%でありながら、CO₂排出は30%以上を占めている。でありながら、ECと日本の合意ラインさえ受けいれようとしない。つづく発言がまたすごい。企業に干渉しないのがアメリカの原則だ、それが自由主義経済だというんです。

ちょっと横道ですが、われわれにとって自由とは大きく分けて3つあります。まずは言論表現の自由、良心の自由などの精神的自由。第2は一党独裁でないところの議会制民主主義、あるいは選挙で代表を選ぶといった政治的自由。3番目の経済的自由、これが市場経済の原理だといわれています。

ベルリンの壁を乗り越えてきたドイツの民衆は、フライハイ!フライハイ!フライハイ!と叫びました。自由!自由!自由!です。彼らの求めた自由は精神的自由が中心だったと思います。独裁体制でずっと抑えられていたものが一挙に解放された。とこ

ろがそのあと東ドイツの選挙にさいして、コール首相が西ドイツ・マルクと東ドイツ・マルクの1対1交換を提案すると、その瞬間に社会民主党優位がひっくりかえって、保守のキリスト教民主同盟へ傾いた。東ドイツ市民の精神的自由は、ものを買う自由へとひっくりかえったんです。人間の当然の傾向ともいえるんですが、精神的自由を求めてベルリンの壁を崩した労働者・市民・知識人はそれを残念に思っています。一党独裁から東ドイツを解放した人々はその選挙で10%前後しか得票できず、少数派になってしまった。

日本の保守政党の人びとも経済的自由、市場経済の自由を重視し、つぎが政治的自由で、精神的自由なんか軽視しています。私は良心・思想・言論などの自由、集会・結社の自由、そういう精神的自由がいちばんたいせつだと思います。議会制民主主義もたいせつだけど、これには欠陥があり、議会制民主主義があるから政治的自由が十全であるとはいえないんです。まして市場経済の自由は問題だらけで、民衆の力、その他の力で規制しなければ、環境問題、南北問題なんか解決できるはずがない。

ブッシュ政権がそのような立場を鮮明にし、6月の環境会議に非協力的な姿勢を示していることは、環境重視をいいながら自らの産業利益にとらわれている北の先進工業国の現状を示していると思います。

南北格差は縮められるのか

南はどうかというと、民衆の生活水準向上意欲はものすごく強烈です。飢えてる状態では、食糧増産のため森林を伐採して畑に変えようというのは当然でしょう。しかもそういう事態におちいったのは自然現象ではなく、北の開発の余波が南に押し寄せたからなんです。南の民衆は自分の生活を守り維持するために、開発に大きな期待をかけている。

南の政府、産業界、大地主も開発を望んでいますが、外国資本とつながり、その下請けとして、森林を伐採したりいろんなことをし、金をもうけて富を蓄積していく。おなじ開発意欲といつても、民衆の開発意欲とは中身に

ズレがあります。

南北問題を解決することは、一国の政治体制や社会のしくみを変えること以上に困難だと思います。南北の格差を縮めることはほんとうに可能でしょうか。北の諸国は経済的に絶対的優位にあり、技術的にも優位にある。南は第1次産業的な自然資源を北に提供し、北はそれを加工し付加価値をつけてもうける。南に工場ができても、それは多国籍企業のひもつきにすぎない。こういう関係をどうやったら打ち破れるでしょうか。

政治レベルの提案としては、スウェーデンやドイツの社会民主党の主張が唯一合理的だと私は思います。単純化していえば、南北格差を埋めようと思えば、北の民衆は生活水準の低下を覚悟しなければいけない、というものです。そういう主張を北の民衆は受け入れるでしょうか、そういう提案をする政党を民衆は支持するでしょうか。

一人ひとりの自覚と不可分

日本は年間1人あたり200kgの紙を消費しています。中国は20kg、アフリカのマリ共和国は1kgで日本の200分の1です。中国もアフリカも人口が膨大です。それらの人びとが200kgの紙を消費できるよう開発をすすめないと平等とはいえない——そのようにつけられたとき北の民衆はどう答えたらしいのか。200kgの紙を消費するのが文明だ、それが平等だといっても、そんなことをやろうとすれば地球の破滅は明らかで、絶対に不可能です。

紙の消費もアメリカが多く、1人あたり300~350kg。ヨーロッパ諸国は日本より少なくて150kgほどですが、それでもマリ共和国とは比較にならない。紙の原料はいまでもなく木材です。熱帯林の消失が大問題になっていますが、それだけでなくアメリカ、カナダ、スウェーデンなど北の国でも大量の木が伐採されているんです。

そういう問題にたいする常識的な答えは、紙の消費を押さえることでしょう。いろいろ努力して年間100kgないし50kgに減らす。その方法としては、たとえば新聞はページ数を3分の1にしたらいい。ニューヨーク・タイムズなんかの日曜版はものすごく厚く、バ

サッときますが、ほとんど読まれないままクズカゴにいく。それが何十万部もでているんです。朝日新聞の発行部数は7百万部、読売は1千万部をめざしていい商売をしていますが、その原料は木です。

大石武一先生が、若い人たちに励まして、朝日新聞に投書をなさった。環境問題が大切だと新聞は書いているけど、まったく大賛成だ、朝日新聞はページ数を半減なさったらどうか、と数字的な根拠をあげて投書された。ところが投書欄に出ない。

みなさん新聞を読んでいますか？京都精華大学の学生に聞くと、あまり読んでいないのに、新聞をとっているんです。新聞にはあってもなくてもいいことがたくさんあります。広告がないと新聞は成り立たないでしょうが、広告欄を減らし、内容も減らす。しかし新聞社にとってはページ数を減らすのは死活問題で、そんなことをしたら倒産するかもしれない。従業員をどうやって食べさせるか、そういう問題にぶつかる。

南北問題、環境問題に共通していえるのは、社会体制や政治体制の問題だけでなく、市民の自覚のありようと不可分なことです。政治は永田町でやっているんですよ。ひどい政治だけど、永田町では政治がやられており、われわれが眠っていても議会政治は動いている。ところが私たちは毎日なにかを消費して生活しているわけで、市民一人ひとりがどのような生活を選択するかということと、環境問題は切り離せないんです。

法規制、経済規制、技術的解決

環境問題への方策はいろいろあります。第1が法規制で、たとえばCO₂の排出を規制するんです。革新市長の時代に、飛鳥田さんが横浜市で、国の規制を上回る規制をやったことがあります。ところが憲法によると、国の法規に反する条例や規制を自治体はやってはいけないことになっている。

憲法は守らないといけないけど、いろんな不備もあります。日本国憲法の第一章第一条は天皇のことですが、フランス、ドイツ、スウェーデン、ペルギーなどの憲法の第一章第一条には人

権の問題、人間の自由の問題で、他に譲りわたすことのできない人権を守るためにこの憲法が存在する、といったことが書かれています。日本国憲法の第一章第一条は「天皇は日本国の象徴であり……」ですが、せめて最後の章にしてほしかったと私は思います。

それはともかく、飛鳥田さんは法的規制をおこない、それは憲法の条文に合致しなかった。しかし、政府が横浜市を相手どって訴訟をおこしたりすると、民衆は政府から離反しますから、そうはできなかった。

ヨーロッパではEC議会ができ、そこで決議が各国議会の決議に優先することが、加盟国の議会で認められてきています。これはたいへんなことなんです。EC議会は社会民主党系の人びとが多数派で、環境問題や南北問題について各国の議会より開明的なんです。それすぐよくなるとは思いませんけど、ヨーロッパではそういう状況がある。では世界的レベルで、環境問題の国際会議や国連において、法的規制ができるかというと、これは疑わしい。しかし、法的規制が必要なことはいうまでもない。

第2は経済的規制です。宇沢弘文さんが主張していますし、世界の国の中ではCO₂の排出に炭素税をかけるといったことをやるべきだといわれます。税金をかけることによってCO₂の拡散を減らそうというんです。

3番目は一部の学者がいっている技術的解決です。簡単にいえば、原子力発電も火力発電もいらない、太陽エネルギーで世界のエネルギー問題が解決できる、ということです。それが可能なら、たしかに解決に近づくだろうけど、技術者たちに聞くと、現実はそう簡単ではない。

民衆による破壊への歯止め

最後に登場してくるのは、民衆が環境破壊にどれだけ歯止めをかけられるか、です。われわれにとってはそれがいちばん重要でしょう。

久しぶりに学生たちと話しあったんですけど、私の年齢になると、彼らの姿勢や生活ぶりについて理解できにくいくらいが出てきますね。たとえば合成洗剤の問題。戦前はシャンプーなん

かなくて、セッケンでゴシゴシ洗ってた。よく泡がたっていいから、ぼくはいまでもセッケンですが、そのほうが頭のはげない確率も高い。学生に、ぼくはセッケンだけど、あなたたちはどう?と聞くと、ちょっとそれはと絶望的なんです。シャンプーがないと生きていけないかのようです。朝シャンをやって、夕方もシャンプーをして、リンスをして、その他いろいろやる。その生活にいちど染まると、なかなか抜け出せない。

若ものがすごくぜいたくなっていますね、ここにきている人はあまりお金がないようですけど(笑い)。私のところにオーストラリアからすごくチャーミングな女性がきている。お母さんが日本人、お父さんがオーストラリア人です。いろんなことがありました、それは省略して、彼女はある大学の2部に入りました。半年ほどしてから、いい青年がみつかったかと聞いたんです。そしたら彼女は即座に、絶望的だと答えました。日本の青年がこんなにフニャフニャとは思わなかったというんです。

その大学はファッションを競うような華やかな雰囲気があって、男の学生がルイ・ヴィトンのバッグに教科書を入れてくるそうです。そして車をもっている。彼女のそばにきて「ぼくこんどね、トヨタの新車を買ったけど、いらっしゃに鎌倉に行かない?」。すると横にいた男が「ぼくはベンツ。ちょっと遊びに行こうよ」。彼女がなんと答えたかというと「わたし新車は大きらいなの、中古がすきなの」。

フランスにいくと学生たちの質素なこと。ジャパンはいて、日本円で千円以下のTシャツを着て、地下鉄で通つてますよ。みんな勉強に懸命で、バイトはしていない。考えてほしいのは日本の大学の授業料の高さ、親たちは泣いてますよ。フランスの国立大学は授業料ゼロですからね。しかしアパート代なんかいるから、バイトは夏休みに集中的にやる。ふだんバイトをやっていたら、追いつけないんです。宿題はあるし、討論が厳しいし……。

日本の東京大学は世界の大学の80番目くらいにランクされています。教授

の質、教育の質、研究のレベル……日本の大学の状態はかなりひどいです。一部の応用工学系で技術的にすぐれた新製品をつくりだし、それが経済を支えているのは事実だけど、大学教育全体をみるとひじょうに程度が低い。学生もトヨタの新車に乗ってるけど、頭は空っぽ。

物から自分をどう解放するか

そんなのはおかしいよ、ぜいたくだよ、アフリカでは子どもたちが毎日こんなふうに死んでるんだよ、といつても、眉も動かさない。それは月世界の話で、日本はとにかく繁栄のなかでたくさんものに囲まれており、そこから自分を解放できない。

ぼくもティッシュペーパーをつかいます。便利ですから。しかし、なくてもすむんです。テーブルふくのにフキンをつかえば、洗ったら何回でもつかえる。ティッシュペーパーは木のなかでも最良の部分をつかうんです。

そういう状況を南の人がみて、うらやましく思うのは当然でしょう。日本の学生はもう車をもっている。自分たちは懸命に働いてもホンダのオートバイも手が届かない。しかし買いたいから、一年分の給料をはたいてオートバイを買う。売るのは日本の産業です。

農村には耕運機をはじめ、いらない機械もどんどん入っています。タイの病院に何十億円もする日本の医療器械が入っています。対象となる患者もいるだろうけど、タイにとっていちばんたいせつなのは結核の患者を減らすこと、風邪の熱で死んでいく子供を救うことなんです。それには何十億もする器械は必要ない。しかし病院は無理をして買っている。

よくいわれることですが、ベルリンの壁の崩壊にもそれがあります。西側の消費生活がテレビを通じて東側に入つて、情報化社会というのはそこが恐ろしいんです。自分たちの生活が孤立してあれば、どんな貧乏にも耐えられる。しかし地球の他の地域に豊かな消費生活があり、自分たちが貧しい生活を強いられているとなると、なんとかして手に入れたい、追いつきたいと思うのが当然でしょう。

そのような南の民衆にむかって、そ

れはつまらないことだ、なんていってもほとんど説得力がない。南の民衆の協力はえられない。問題はそこをどうやったら突破できるか、でしょう。

とにかく実行しないことには

私としては、小学校からの教育をこのさい徹底的に考える必要があると思います。親が子になにを教えるか徹底的に考える。教職員組合はふたつに分かれ、あわせて50%にたらなくなつたけど、がんばってほしいですね。組合に入っていなくても、組合の方針よりいいことを考えている良心的な先生もおられるから、そういう先生たちが正面から問題を突き出していく。

市民団体には、たとえば市民にすぐできる行動のカタログをつくってもらう。ティッシュペーパーはやめてフキンをつかおう、ティッシュペーパーをつかうにしろ再生紙にしよう、というふうに。フランスには緑を歌い文句にするスーパーがあって、無農薬の農作物、再生紙のトイレットペーパーなどを売っている。つれあいが風邪をひいて、それで鼻をかんでいたら鼻が痛くなつたというんです。再生紙ですからちょっと固いんですよ。しかしづつとつかったんです。些細なことだけど、そういうことは無数にあります。合成洗剤、合成シャンプーはやめようとか、ブランドものはイキじゃない、無印のいいものをつかおうとか、そういう行動カタログを数百も千もつくつて、二つでも三つでもいい、とにかくはじめてください、と呼びかける。

たいせつな“世の中のために”

環境問題にしろ南北問題にしろ、一人ひとりの市民が自覺的にならないことには、大量生産・大量消費のメカニズムは打ち破れない。その問題がたいへん重要だと思うんです。

その根底には日本人が戦後につくりだした価値観の問題があります。第1に快適な生活、第2により多くの収入という、2つの価値観がすっかり定着してしまった。相互に結びついているけど、結婚の条件もその2つですね。あの職業は世の中のためになるからいい、そういう基準もあったんですよ。国家のためという基準は私はあまり賛成ではありませんが、世の中のためと

いう基準はたいせつだと思うんです。

憲法第九条は大事です。その理由はいうまでもない。戦争はしない、軍隊はもたない、核兵器をもたない、つくれない、もちこませない、それはもちろんたいせつです。しかしそれら“しない”ことにプラスして、われわれは世界になにをなすべきか。社会にたいし、世の中にたいし、なにをなすべきか。そのなすべきことがこれから的问题です。戦争はしない、武器はもたない、兵隊にはいかない、しかしブランドものを着て、ベンツに乗っている、それで平和国家といえるかどうか。

フランスに「国境を越える医師団」という民間団体があります。1967~68年の5月革命を体験した医者が事務局長で、世界のどこかで災害がおこつたりすると、即刻、医師団がかけつける。それがだんだん整備され、いろんな救援資材や飛行機までもち、登録している医者がヨーロッパで4千人、世界に6千人います。

湾岸戦争のときも、クルド人のところにいたり、いろんなことをしました。日本では犬養道子さんが声をからして呼びかけましたね。そのとき、その事務局長は日本にきました。財界や市民からお金を集めるためです。医者には最初から期待していなかった。それまで日本人の医者の登録はゼロだった。その後30~40人が登録し、フィリピンなどに出かけるようになりましたが、世界に6千人いるなかで、日本はそれだけです。

病院勤務を何か月も休めないと、開業医は長く留守にできないとか、いろんな理由があるだろうけど、根本的には、苦しんでいる人のため、世の中のためにどこにでも出かけていくという、そういう医者がいない、そういう医者をつくる医学部が存在しないということでしょう。

まにあうか、まにあわないか

そういうなかでも環境問題、南北問題への市民の関心は世界各国で高まりつつあります。問題は、まにあうか、まにあわないかです。京都精華大学の中尾ハジメさんと話したんですけど、彼はまにあわないという説です。たとえそうでも、できるだけのことをやる

というんです。かつていいねといったんですけど（笑い）。かつて東大の渡辺一夫さんは抵抗しながら減んでいくというたけど、ほんとにまにあうかまにあわないかの瀬戸際なんですね。

そのように困難で、しかも人類の運命を左右するような重大な問題に直面すると、自然に心がおだやかでなくなってしまいます。不安とか、あせりとか、絶望とか、怒りとか、逃避とか、あるいは無関心をよそおうとか……私自身、大学の教師をしているとき、教室でつい熱を入れすぎている自分に気づくことがありました。

ある学生が、やさしいというか、手続きらしいというか、思わず爆笑した文章を答案に書いていました。あらましこうです。“先生の話は具体的でおもしろかったです。しかし先生は少しあせっているように感じました。考えてみると先生のこれから壽命は極端に短かい。だからあせるのも当然だと思います。しかし若いぼくはもう少しゆっくり歩きたいと思います……”。

戦後日本の左翼の語り口には、もつとはげしい“あせり”があったかもしれません。そのことがかえって市民を遠ざけてしまったところもあったと思います。まにあわないというあせりによって、事態をさらにまにあわなくさせることもあるのです。

あせりや独善を捨ててかかろう

たしかにもう時間がなくなっているほどに、事態が深刻だということも事実です。その事実は認識すべきでしょう。しかしその語り口におしつけがましさがあつてはならないし、自分だけが正しい認識者であるかのように自負してもならないと思います。一党独裁や“科学的”認識の独善のかけらが、市民運動のなかに忍びこまないように心すべきだと思うのです。

しかしそれは方法論の問題です。現存する環境問題、南北問題について、市民の一人ひとりがそれをどのように自分の問題として考え、どのように自分の日常生活のなかで行動していくかがもっともたいせつなことでしょう。そうしたことに気づいた民衆のひろがりなしに、これらの大きな問題が解決していくことはないと思います。

中国広州市沙面公園で記念植樹

「緑の地球」への思いを実感

安田順恵（「気功を知る中国の旅」団長）



広州市沙面公園で記念植樹（2月28日）。左端が広東省人民对外友好協会会長・黄群さん、右端が筆者。

関西日中交流懇談会が主催される「気功を知る中国の旅」は、今年で第3回を迎えました。広州体育学院の曾広錫先生から、直接指導を受けることを主目的として、去る2月26日から1週間・広東省を訪問致しました。

第3次のこの団が、特に今年大きな

特色をもつことは、気功の練功、観光の他に、「植樹奉仕」という定期的な行事を行なわせていただいたことだと思われます。

曾広錫先生の創始された「自然気功」を修練するなかで、如何に良い地球環境が人間にとて大切なものであるか、平素忘

れがちな清らかな空気、一本の木にも宿る生命の源、これらのものへの思い入れが気功を学ぶ者には人一倍強いわけです。

旅行中の限られた短期間内での植樹希望の申し出に対し、広東省人民对外友好協会は絶大なる御配慮をして下さ

いました。

広州市で一番美しいと思われる珠江のほとりの沙面公園の一等地を提供して下さり、二種類のビンロー樹15本が根まわしして用意されておりました。

広東省人民对外友好協会の黄群会長をはじめ多くの要職の方々が私たち32名の団員と共にスコップを持って下さいました。

一方国際友好園と銘うたった噴水やモニュメントのある芝生の美しい園には、カサブランカという大輪の白百合の球根50球を、これまた共に土を掘って植えさせていただきました。これは日中國交正常化20周年を祝って国際ソロブチミスト奈良という女性の奉仕団体から寄贈されたものであります。

当日の模様はニュースとなってその夜テレビで放映されました。これは象徴的な植樹作業ながら如何に日中両国の人びとが「緑の地球」への願望を抱いているかの表われではないかと思います。

一過性に終わることなく、さらに大きな植樹の輪をひろげていきたいと誓いました。

日高六郎さんの講演会

10代・20代も たくさん参加 その場で多数の入会者

緑の地球ネットワーク（準）は3月29日の午後、「エルおおさか」で日高六郎さんの講演会を開きました。準備期間が1週間しかなくて心配したのですが、当日は100名の参加があり、大成功をおさめることができました。なかでも10代、20代の参加者が30名以上あり、この問題への関心の強さと、この運動の今後にたいする希望を共有することができました。

日高さんの講演の内容は3~6ページに掲

載しております。講演に先だって佐野代表世話人が経過と私たちの活動計画を報告し、白形さんが入会の呼びかけをおこなったところ、会場で入会してくださったかたもたくさんありました。3月は27日に中村尚司さんの講演会を開きますが、以後も月1回はこのような活動にとりくむ予定です。



100名の参加者で熱氣あふれた日高六郎さん講演会

会報を読み

胸が熱く…

浦田勝美（自営業）

「緑の地球ネットワーク」の趣旨に賛同し、入会します。友人のOさんも入会してくれました。

会報を読み、写真をみて感動しています。渾源に行ったことはありませんが、私は、恒山の南側の阜平、軍城付近で1946年の暮れから49年まで八路軍の一員として働いたことがあります。

第3次国内革命戦争時期の後方根拠地でしたし、抗日戦争当時の基地でもあったところです。この地の農民の方々にどれだけお世話になったか、それを思うと今でも胸が熱くなります。

あの荒れ果てた山に植林をされると、皆様の行動は、地元の農民の方々にどれほど喜ばれることでしょう。微力ですが私も会員になり、今後とも協力させていただくつもりです。

守れ！熱帯林

「守れ！熱帯林・シンポジウム」（5月9日午後6時15分～・大阪市立労働会館）、「全国会議」（5月9日・10日午後6時～・十三会館）に参加を／

西 岡 良 夫（ウータン・森と生活を考える会）

今、マレーシアのサラワク州では、熱帯林とそこに数千年も暮らしてきたブナン人ら先住民が生存の危機に直面しています。先住民たちは狩猟、焼畑耕作など行ってきましたが、商業伐採によって奥地の熱帯林まで伐られようとしています。

彼らは自分たちの森と生活を守るために、1987年より伐採道路の封鎖を行ったので、サラワク州政府などは軍隊などで弾圧し、今まだ600名を超える逮捕者を出しています。しかし、今も森の破壊は続き、先住民の土地に不当な伐採権が与えられています。

また、この6月に環境サミットが開かれるブラジルのアマゾンでは、もっと大規模な熱帯林の破壊が進行しています。

このまま熱帯林の破壊が続くのならば、サラワクの原生林は10年以内に消失し、アマゾンの森も2075年になくなると指摘されています。「生命の宝庫」である熱帯林と、そこに住む人びとだけでなく、地球環境もSOSを発せねばならないのが現状です。

一方、私たちをはじめ熱帯林保護団体も4年前ごろから次々と結成され、世界一の熱帯木材消費国、日本を変え

ようと努力を始めました。昨年10月の東京都の熱帯木材使用削減に続いて、今年1月に大阪市が、2月には大阪府が公共事業について熱帯木材使用削減案を表明しました。内容は不十分でも一步前進はじめたところです。

フィリピン、インドネシアのハゲ山のようにさせないために、今後もっと熱帯木材使用削減が必要です。

私たち、ウータン・森と生活を考える会をはじめ京都、奈良のグループと一緒にになって5月9日には「守れ！熱帯林・シンポジウム」を、9日～10日には全国会議を大阪市立労働会館、十三会館にて開きます。是非ご参加を！

【連絡先】ウータン・森と生活を考える会 ☎06-372-1561

た。

城阪さんの持論は「植林は苗木作りがかんじん」、苗圃で種から苗木を育て山に移植するまで木の将来が決定されるのだそう。こういう話になるとまるで孫の成長を見つめるように目を輝かせ、しゃべる口調にも熱がこもってくる。中国と日本の植林方法の違いから何度も失敗を重ねた経験や、事情や慣習のちがいから自分の思い通りには進まなかったことなど、これから現地での活動を予定している私たちにとっては示唆に富む話ばかりだった。

城阪さんは最後に「植物の育ちにくい黄土高原に木を植えるのは並大抵のことではない。皆さんの大好きなロマンが現実に実を結ぶことを願っています」と緑の地球ネットワークへの支援を約束していただいた。

苗木を中国に送り続ける城阪光弥さん

大阪府豊能郡能勢町に住む城阪光弥さん（69歳）は、1984年以来、中国各地に毎年のようにでかけて現地の農村や山地にクリやスギなどの苗木を贈り続けている。梅の香漂う能勢路のご自宅を訪ねて話をうかがった。

城阪さんは江戸時代から代々続く林業専業家で、この道40年のベテラン。84年の湖南省をかわきりに安徽省、山東省でクリの苗木作りや接ぎ木を指導するかたわら、最近では住民の経済効果を考えてクリ林でのイチゴやアズキ、クロダイズなどの栽培にも成功している。



苗木畠で接ぎ木の説明をする城阪さん

10数年前、たまたま観光旅行で訪れた広州で一木もない荒廃した山々を見て、なんとか緑を回復できないかと考えたのが、この活動を始めたきっかけだそうだ。「戦争で迷惑をかけたおわりのためにも自分の植林技術を中国人びとに伝え、緑化のお役にたちたい」と自分の山林を売って資金をつくり、スギ、ヒノキの種15キロを持って訪中。苗木作りから現地で指導してき